湖南における反袁闘争の一側面について

清　水　　稔

1．問題の所在

第２革命を武力で制圧した袁世凱は，独裁への道を強化していった。1913年10月，国会議員を懐柔し威嚇して自らを正式の大総統に選出させ，11月，第２革命に加担した国民党の解散と国民党議員の議員資格の剝奪を命じ，翌14年１月には国会を廃止した。５月には，ついに孫文らが辛亥革命の勝利の証とした「民国」の「臨時約法」を破棄し，権限の総てを大総統に集中した「似非共和」の新約法をつくり，12月，大総統選挙法を改正し，事実上の終身大総統の地位を確保した。こうして「臨時約法」のなかで約束された主権在民，基本的人権の尊重，議会制民主主義はことごとく葬り去られ，もはや北洋軍閥領袖袁世凱の専横を阻止するものは何もなくなり，かれの野望は帝制の復活にまでふくれあがった。

1915年１月，中国の独占的支配をねらう日本は，第一次世界大戦の間隙に乗じて，袁世凱に帝制の承認とひきかえに21か条要求を突きつけた。これにたいし袁は５月，日本の最後通牒に屈してそれを受理した。これを契機に袁世凱は帝制へのはずみをつけることになる。帝制運動の前座を担ったのは，袁の周辺にいた外国人顧問や政客たちであった。アメリカ人顧問でコロンビア大学教授のグッドノウや日本人の法律顧問有賀長雄らは，民智の低い中国では共和が適さないと発言して帝制を賞揚した。それにつづいて楊度（湘潭出身）らは袁の内意をうけて８月，籌安会を組織し，学問的見地からと称して帝制を擁護した。また各地で帝制への国体変更をもとめる多くの請願団が意図的に組織され，帝制賛成の民意がつくられていった。それを受ける形で，政府“お手盛り”の国民代表大会が組織され，12月には各省で国体決定のための国民代表大会が開かれて帝制が承認され，袁世凱は皇帝に推挙されるにいたった。袁はそれを受諾し，1916年をもって中華帝国洪憲元年とし，１月１日より帝制を実施することとなる。全くの茶番劇であった。

袁世凱の帝制施行は明らかに時代に逆行するものであった。一方，帝制反対の世論が高まりつつあるなかで，袁を擁護してきた進歩党の梁啓超，前雲南都督蔡鍔らは，袁の独裁化によってその活動の場を失ったことから一転して討袁派となり，雲南将軍（1914年6月都督を改称する）唐継堯らと組んで護国軍を編成し，帝制施行の間近い1915年12月25日，雲南の独立を宣言し，討袁の火蓋が切っておとされた。いわゆる第3革命の開始である。この挙兵は第2革命で敗北し各地に潜伏していた革命派の反袁活動をも活発にし，16年1月には貴州が，3月には広西（袁の部下陸栄廷が将軍であった）が，それぞれ独立を宣言した。反袁の動きは袁の予想をはるかにこえていた。列強による帝制延期の通告，軍閥内部からの帝制取り消しの勧告が出されるにおよんで，3月22日袁は帝制を取り消して事態の収拾をはかろうとしたが，広東・浙江・陝西・四川・湖南の各省が相次いで独立し，討袁の火の手はますます広がっていった。そのなかで6月6日袁世凱は悶死した。新たに大総統となった黎元洪は，臨時約法と旧国会を復活，その措置に呼応して南方諸省も独立を取り消し，反袁に決起したものの多くは新政権のもとに復帰した。ここに南北は統一され，第3革命は収束したのである。

以上が第3革命の概要である。本稿はこれをふまえ，第3革命期における湖南の政治状況，とくに反袁駆湯（袁世凱討伐と湯薌銘追放）の闘争過程を具体的に明らかにすることにある。なぜなら第3革命の前後数年間にわたって湖南で大規模に展開された反袁駆湯の闘いが，北洋軍閥に重大な打撃を与え，かつ全国的に闘われた反袁闘争のなかの重要な一環を構成していたにもかかわらず，その実態があまり解明されていないからである[1)]。

---

1) 第3革命は辛亥革命・第2革命と連続する革命として，辛亥革命史のなかに明確に位置づけて研究し評価しなければならないが，そうした成果は皆無に等しい。ただ第3革命の拠点であった雲南・貴州・広西・広東等に焦点をあてた個別研究は散見されるが，そうした蓄積もきわめてとぼしいのが現状である。本稿もまずこうした個別研究の一つとして湖南における第3革命を追踪したものである。第3革命を全体として概観したものに謝本書等『護国運動史』（貴州人民出版社，1982年），資料集として中国第2歴史檔案館・雲南省檔案館『護法運動』（〈中華民国史檔案資料叢刊〉檔案出版社，1993年），李希泌等『護法運動資料選編』上下（中華書局，1984年），雲南省社会科学院貴州省社会科学院歴史研究所『護国文献』上下（貴州人民出版社，1995年），中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会『革命文献』第47輯〈討袁史料（2)〉（中央文物供応社，中華民国58年），回想録として中国人民政治協商会議全国委員会文史資料研究委員会等『護国討袁親歴記』（文史資料出版社，1985年）等が出版されている。なお湖南における第3革命関係の資料集・回想録・研究等は以下の註記を参照されたい。本稿の作成にあたり，李時岳『辛亥革命時期両湖地区的革命運動』（生活・読書・新知三聯書店，1957年），湖南省志編纂委員会『湖南省志』第1巻〈湖南近百年大事記述〉（第2次修訂本，湖南人民出版社，1979年），楊世驥『辛亥革命前後湖南史事』（湖南人民出版社，1982年），伍新福・劉央央・宋斐夫主編『湖南通史』（湖南出版社，1994年）等から多くの教示をえた。記して感謝の意を表する。

2．湯薌銘支配下の湖南

国会選挙における国民党の勝利により国民党内閣の成立を恐れた袁世凱は，1913年3月国民党の領袖宋教仁を上海駅頭で暗殺，4月末には国会を無視して五国銀行団から2500万ポンドの善後借款を導入，独裁のための政治的・財政的基盤を確保した。さらに6月袁は，機先を制し，借款に反対する国民党系の3都督（江西都督李烈均，広東都督胡漢民，安徽都督柏文蔚）を罷免し，かれらの武力をそごうとした。7月12日ついに李烈均は江西の湖口で独立を宣言して反袁に決起すると，安徽・江蘇・湖南・広東・四川も相次いで独立し，討袁の兵をあげた。これが辛亥革命につづく第2革命であるが，孫文・黄興・李烈均ら南方の革命軍はとうてい袁世凱ら北洋軍の敵ではなかった。各地で撃破され，2か月たらずで第2革命は失敗に終わった。

第2革命当時の湖南の政治状況についてみておこう。湖南は国民党の指導者黄興（善化出身）・宋教仁（桃源）らの故郷でもあり，国民党の勢力が比較的強い地域の一つであった。中央レベルにおける同盟会改組と国民党結成に呼応して湖南でも，1912年9月同盟会と統一共和党・国民公党・国民共進会・共和実進会・全国連合進行会・民社・辛亥倶楽部等の政党が合併し，国民党湖南支部が長沙に結成され，湖南都督譚延闓（茶陵，前清代の立憲派の領袖の一人，前湖南省諮議局議長）がその支部長に，湖南民政内務司長仇鰲（湘陰，旧華興会・同盟会会員）が副支部長となった。湖南の国民党もまた中央同様に，きたる国会議員選挙と責任内閣実現にむけての，同盟会（革命派）と立憲派あるいは旧官僚系の諸政党による「新旧の合作，朝野の合作」であり，それは所詮数の野合でしかなかった[2)]。

1913年3月の宋教仁暗殺事件，4月末の善後借款締結によって国内情勢は騒然となり，袁世凱にたいする批判は全国的に高まり広がろうとしていた。それは湖南においても同様で，とりわけ国民党員の憤激は大きかった。湖南国民党の指導者間では，討袁をめぐり，法による解決か，武力による解決か等の激しい議論がかわされ，なかなか決着をみないでいた[3)]のにたいし，湖南国民党の下部組織では反袁の高まりを見せていた。長沙では公民会（劉崧衡ら）・外府連合会（鄒代藩ら）・公民団（周召期ら）がそれぞれ組織され，宋教仁暗殺事件と善後借款問題で政府を糾弾するキャンペインに

2）その一端は『湖南省志』第1巻（前掲）362頁の脚注「国民党湖南支部組成人員名単」からもわかる。

3）文公直『最近三十年中国軍事史』上冊（〈中国現代史料叢書〉文星書店，中華民国51年）315頁。当時の湖南国民党の指導層として竜璋・譚人鳳・周震麟・宋教仁・唐蟒・仇鰲らがいた。

ついて協議していた。5月14日この三団体は連合して湖南公民団連合大会を長沙教育総会会館で開催することになった。千余名の参会者をえて，大会は，宋教仁暗殺事件を徹底的に調査すること，善後借款を拒否すること，袁世凱の支配から脱して湖南の独立をはかることを宣言した。さらに湖南政府（暗に譚延闓都督を指す）がもし民意である前項を違え，己一人の利禄をはかろうとするならば，納税の拒否等，それ相応の対応をするであろうと表明，湖南政府に厳しい決断をもとめたのである[4]。7月12日湖口で討袁の挙兵（第2革命）が宣せられ，15日に南京，17日に安慶がそれぞれ独立し，湖南も独立を迫られていた。しかし湖南都督譚延闓は討袁にふみきれないでいた。その時，朋友の副総統黎元洪から，討袁独立を「暫定的，一時的，便宜的な措置」と考え，表向きは反袁に「付和」し，徐々にそれを平定すればよい[5]，との示唆をうけ，7月25日ついに湖南も独立を宣言するにいたった[6]。譚延闓は湖南都督の名で各地に通電，そのなかで，袁世凱は口では共和を唱えながら実のところは専制を指向し，職責は総統といえどもその行動は盗賊に等しいと批判し，かれの犯した大罪を列挙し，「袁賊」と関係を絶ち，「袁賊」を滅ぼすことを宣言した[7]。

湖南の独立につづいて，広東・福建・四川等も相次いで独立したが，独立各省間における統一した指揮系統がなかったこと，相互関係が密接でなかったたこと，武器・弾薬・資金が不足していたこと等から，8月にはいると，南京・上海・湖口・九江さらには広州・安慶でも討袁軍は敗走，袁世凱の圧倒的な軍事力の前になすすべもなかった。湖南も8月13日独立の取り消しを宣言するにいたった。

独立を取り消した譚延闓は，討袁を強硬に主張した省内の国民党員にたいし公然と圧力を加えた。湖南の第2革命に指導的役割を果たした譚人鳳（新化出身）・周震麟（寧郷）・鄒永成（新化）・蔣翊武（澧県）らは迫られて省外に逃れ，湖南討袁軍司令程潜（醴陵）・程子楷（興寧）・唐蟒（瀏陽）らには逮捕命令が出された。また湖南の討袁独立を底辺から支えた湖南公民団連合会の劉崧衡（衡陽）・魏伯益らは省城を奪取して都督の追放と湖南の独立をはからんとしたが，事前に露見し殺害された。こう

4) 『長沙日報』1913年5月12日「公民団会議紀事」，同5月14日「公民団開会紀実」，同5月15日「公民連合会紀実」等。
5) 譚人鳳撰『石叟牌詞』（甘粛人民出版社，1983年）163-164頁。
6) 『長沙日報』1913年7月26日「社論（2）今後之湖南」によれば7月25日に正式に独立とあるが，『湖南省志』（前掲），楊世驥『辛亥革命前後湖南史事』（前掲）では，『国民公報』1913年7月19日「独立要聞」等（未見）を引いて7月17日としている。なお前掲『革命文献』第44輯〈二次革命史料)〉（中央文物供応社，中華民国57年）329-330頁の「湖南宣布独立之経過」によれば，21日から25日にかけて，いつ独立を宣布して各省に通電するかをめぐって混乱があり，結局25日になったという。
7) 『革命文献』第44輯（前掲）「譚延闓致北京衆参両院及各界各報宣布袁世凱罪状書」334頁。

して譚延闓はひたすら袁世凱に恭順の意を示し，静かに中央の処分を待つ姿勢をとったのである。譚の盟友黎元洪は袁世凱にたいし，湖南は独立したけれども，譚都督の本心はそれ以前と基本的に変わってはいないと弁明し，かれを都督として留めるようもとめた[8]。袁も湖南の独立が譚の本心ではないことに理解を示した[9]が，反袁に参加した南方諸勢力を獅子身中の虫と考えていた袁世凱は，譚も同罪とし，湖南都督を罷免し処罰した[10]。

1913年10月初め，長江下流域での戦闘が完全に終結すると，袁世凱は九江周辺の水域を偵察巡航中の海軍部次長湯薌銘を湖南査弁使に任命した。湯はただちに湖口より水路岳州に直行して長沙にはいり，討袁勢力の湖南からの根絶をはかるとともに，湖南を反袁の西南諸省を制圧する橋頭堡とした。10月24日，湖南査弁使湯は譚延闓にかわって湖南都督の職に就いた。以後，湖南は北洋軍閥政権にとって戦略上重要な拠点になると同時に，長期にわたる南北の対立抗争の場となった。

湯薌銘は，字は鋳新，湖北蘄水の人。兄は清末立憲派の領袖湯化竜で，湯兄弟の4番目にあたることから「湯四爺」と呼ばれた。1903年挙人となり，武昌の文普通学堂にはいる。05年選抜されてフランス，ついでイギリスに留学，海軍について学んだ。そのパリ留学中に孫文の革命演説に共感し，同盟会に参加した。しかし後悔の念が強くなり，孫文の小鞄のなかから自分と湖北籍の仲間の入党誓約書等を盗み，それを駐仏公使孫宝琦に手渡したことが露顕し，会を除籍された。そのため留学生仲間からは忌避されたという。10年帰国して，軍艦鏡清の機関長，南探の副長等を歴任し，辛亥革命時には海軍統制薩鎮冰の参謀として軍艦楚有に坐乗し，武漢の革命軍と対峙したが，湖北軍政府民政司長となった兄湯化竜の帰順勧告を受け入れて革命軍に呼応した。12年南京に中華民国臨時政府が樹立されると，海軍部次長に抜擢され，まもなく北京で袁世凱と邂逅，かれの重用をうけ，海軍部次長の職務を継続することとなった[11]。

---

8)　易国幹等『黎副総統政書』(〈中国現代史料叢書〉文星書店，中華民国51年）巻26「上　大総統」中華民国2年8月16日，8月17日。

9)　子虚子『湘事記』(北京正蒙印書局，中華民国3年）巻2政党篇。

10)　譚延闓は陸軍部より4等有期徒刑に一旦は処せられたが，朋友の副総統黎元洪が譚の身柄を保証したことによって特赦された。陶菊隠『北洋軍閥統治時期史話』第1冊（生活・讀書・新知三聯書店，1957年）206頁。

11)　賀覚非編著『辛亥武昌首義人物伝』下冊（中華書局，1982年），劉紹唐主編『民国人物小伝』第8冊（伝記文学出版社，中華民国76年）所収の人物伝「湯薌銘」，中華人民政治協商会議全国委員会文史資料研究委員会『辛亥革命回憶録』第6集（文史資料出版社，1981年）所収の朱和中遺稿，湯薌銘の回憶，王時澤「湯薌銘事迹片断」(中国人民政治協商会議湖南省委員会文史資料研究委員会『湖南文史資料選輯』第15輯，湖南人民出版社，1982年)，「関于湯薌銘在湘暴行的回憶（座談訪問記録）」(同前『湖南文史資料選輯』第4集修訂合編↗

湯薌銘は袁世凱の股肱の臣として一貫して革命に反対する立場にたち，湖南における軍事的・政治的・経済的支配の強化を袁世凱の政治路線にそって進めたのである。まず反袁を指導した前譚延闓政権下の各長官や湖南国民党指導部にたいする厳しい弾圧を行った。1913年10月10日，譚政権を支えた財政司長楊徳麟（国民党湖南支部政務研究会長）・司法司長蕭仲祁（同政事副主任）・教育司長唐聯璧（同文事副主任）・警察局長文経緯（同評議員）・会計検査院長易宗羲（同前）・籌餉局長伍任鈞（同会計副主任）ら16名を逮捕し，内務司署内に拘禁した[12]。かれらはともに湖南の国民党員として重責を果たしてきた人達でもあった。そのうち楊徳麟（長沙出身）・伍任鈞（新化）らは反袁の立場を堅持しつづけたが，文経緯（長沙）・易宗羲（善化）らは譚延闓の独立取り消しの行動を支持し，袁世凱との妥協をはかろうとしていた。しかし湯薌銘はかれらの信条を一切斟酌することなく，13日逮捕者全員を銃殺に処した。刑の執行にあたり，宣布された楊徳麟の罪状書によれば，「楊徳麟は長者といわれ，官界にあって貪欲・横暴であるとの声は聴かれない。しかし財政司長として公金を乱発し悪人を野放しにしてきた。これは法律で許されるべきことではない」[13] と。ここにいう「公金を乱発し」とは，楊徳麟が湯入湘以前に，湖南省財政司長としての権限を利用して，湘軍＝討袁軍の財政援助をしたことを指している。つまり討袁に与したことが断罪されたのである。

ついで討袁軍を支えた湖南軍隊の解散と退役軍人の排除を強行した。湖南軍隊の解散と退役軍人の排除にあたり，湯薌銘はしばしば北洋政府陸軍部と電報で協議を重ねている。そのなかで次のように述べている。

> 湖南省の現状は，表面上は平静といえるけれども，この二，三年来，本省の退役軍人および外省から流入した退役兵士が十余万人の多きにいたり，かれらが各地に潜伏していて，杞憂はまだ除かれてはいない。何か事があれば，これに乗じて変乱がおこるであろう[14]。旧軍を淘汰しようとすれば，地方の鎮圧に支障をきたすであろうし，新軍を増補しようとすれば，予算がなくてうまくいかない。…まず老弱を淘汰して冗費を節約し，新軍を増補して鎮圧に資することが，実は当面

↘本，湖南人民出版社，1982年）所収の黄一欧・蕭仲祁・甘融・金貢安らの回憶による。なお一部の回憶には日本にも留学したことが記されている。

12） 蕭仲祁『悼楊性恂（徳麟）詩注』稿本，楊世驥『辛亥革命前後湖南史事』（前掲）265頁。

13） 涂竹居「湯薌銘在湘暴行及籌備帝制紀実」（中国人民政治協商会議全国委員会文史資料研究委員会『文史資料選輯』第48輯，文史資料出版社，1981年）141頁。

14） 「湯薌銘禍湘録」〈湯薌銘督湘往来電―1914年，1．致陸軍部删電4月15日〉（中国社会科学院近代史研究所近代史資料編輯組『近代史資料』総43号，1980年第3期，中華書局）97頁。

の重要かつ実際的な方策である[15]。その具体的な施策として，一万四千余人の湖南軍のなかから三，四千名を選抜して小隊に改編し，各県に分属させ，残り九千余名を総て整理し，その浮いた費用で新軍の練成をはかることである[16]。

しかし湯薌銘は，旧軍の裁兵にたいする不安，自ら統括できる兵数の限界等から，北洋軍を湖南に投入することによって湖南軍の改編・淘汰をおしすすめようとした。そこでかれは，中央に次のように打電した。

湖南と江西・貴州・四川・広東等の交界地域は，もともと盗藪とよばれ，外匪と内奸が互いに手を結んで煽動している。巡防隊から裁兵に着手しているが，現第39混成旅団は省城制圧の用に資するので，ここから辺境鎮定の兵員をさくことはできない。この過渡期の空白をねらって盗藪における変乱は免れがたいと思われる。中央より歩兵2団を湖南の郴・桂・永・宝・靖・沅一帯に派遣し，鎮定にあてるようもとめる[17]。

それをうけて中央は，湯の裁兵計画を認め，中央より歩兵2団を湖南に派遣することを決め[18]，岳州に駐留する中央陸軍第3師第6旅団歩兵第11団の各営を随時衡山・常徳・新化等の地へ移駐させ，鎮定にあてることとした[19]。こうして湯薌銘は，北軍を導入して湖南の「清郷」を促進することになった。

湖南省はいうまでもなく革命派の重鎮であった黄興・宋教仁の故郷であり，華興会・同盟会・国民党など革命派による反清・反袁の闘いが歴史的に繰り返し展開されてきた伝統をもっている。それだけに第2革命を鎮圧し，湖南国民党指導部を壊滅したとはいえ，袁世凱は湖南革命派の動向にたえず注意を払っていた。湖南都督となった湯薌銘はその意をうけて，革命派（とくに湖南国民党下部組織の構成員）およびそれを支援する民衆の掃討作戦を執拗に展開した。かれは，まず長沙に大規模な陸軍模範監獄を建設，腹心で「閻魔大王」といわれた華世義を軍法課長に任じ，特務偵察員を各地に潜伏させ，ひそかに民情の探索にあたらせた。こうした偵察網のなかで，反袁共和をもとめて活動していた革命派の人々が多数捕らえられ，殺害された。さらに一般の民衆にたいしても，「せせら笑いをした」「尋問に応じなかった」「法規を無視し軍警

15）同前〈2．致段祺瑞函4月25日〉97頁，同前〈3．致陸軍部有電4月25日〉98頁。
16）同前。
17）同前〈3．致陸軍部有電4月25日〉98頁，同前〈4．致陸軍部支電4月25日〉99頁。
18）「陸軍第3師報告書」〈陸軍第3師歩兵第9団由豫調湘之原因5月21日〉（前掲『近代史資料』総43号）137頁。
19）同前〈歩兵第11団第3営暫駐湘潭報告6月28日〉〈歩兵第11団第1営向衡山第2営向常徳6月29日〉等，137-139頁。

の尊厳を犯した」等の罪名で不当な逮捕や投獄を行ったのである[20]。後の護国軍湖南総司令程潜の回想によれば，

> あるものは革命派の人達と姻戚関係があるという理由で連座させられ，あるものは不満の言動をはいたという理由で，不測の禍害をこおむった。巷間の風聞によって連座するものは婦女にまでおよび，腹誹（口でなく腹のなかで誹謗する）の罪で徒刑となるものもいた。はなはだしい場合には生業をもつ商民たちはいつも城外に身を置かねばならなかったし，遊学した学生たちの多くは帰郷することもできないありさまで，その惨状は筆舌に尽しがたい[21]。

たとえば駐省邵陽中学の国文教師李洞天は，学生が書いた作文のなかの“時代を傷む”という言葉にたいし，それを褒めたとの罪で投獄され，24時間もたたないうちに屍となって路上に投げ捨てられた。また彭焜年という14歳の学生は“国事”を語ったがために銃殺された。とりわけ教育界にたいする弾圧は激しかった。修業学校・明徳学校の学生・教師で殺された者は300名にもおよんだ[22]。不完全な統計ではあるが，湯薌銘の湖南都督在職中3年間の連座による事件は200件余り[23]，無実の罪で殺された者は一万六千七百余名を数えた[24]という。湖南民衆の誰もが湯を「湯屠戸」と呼び，かれの人権抑圧にたいする恨みと憤りは高まらざるをえなかった。

一般に軍閥は，軍事力を背景に私的蓄財や軍費調達のために公的機関を掌握し，税による収奪と人材・物資の徴発を強要する集団である。南北両軍閥はともに基本的にはこのような集団である。とくに北洋軍閥による湖南の占領[25]は，かれらの総帥の武力による全国制覇の一環であり，またかれらが湖南にとっては客軍であったことから，軍事的占領の意味合いが強かった。かれらの支配は，省経済を無視した公債・紙幣の乱発，民衆の再生産を無視した収奪・徴発・暴行等まさに略奪的であった。湯薌銘統治期の湖南省政府の財政状況をみると，1914年，16年の歳入に占める軍事支出費の割合は，58.9%，50.9%で，軍事費の占める割合はきわめて高い。実際の予算執行

20） 何勁（雨衣）『獄中日記』（稿本）曹典求蔵，楊世驥『辛亥革命前後湖南史事』（前掲）265頁所収。

21） 程潜「護国之役前後回憶　付録〈護国軍湖南総司令程潜布告湯薌銘罪状〉」（『文史資料選輯』第48輯，前掲）50頁。

22） 同前，51頁。詳しくは『湖南公報』1914年5月28日〈省市新聞〉，楊世驥『辛亥革命前後湖南史事』（前掲）265頁。

23） 同前，49頁。

24） 「関于湯薌銘在湘暴行的回憶（座談訪問記録）」（前掲『湖南文史資料選輯』第4集修訂合編本）65頁。

25） 湯薌銘の他に，傅良佐（督軍在位1917年8月-11月），張敬堯（同1918年3月-20年6月）らがいる。

にあたっては他の費目も軍事費に流用されたので，省財政は軍事予算であったといってよい[26]。また軍閥による金融政策も収奪の道具であった。金融の要である銀行をその管轄下において，鈔票・公債を乱発し，私的蓄財や資金流用の機関とした。たとえば官営湖南銀行が発行した銅元票を例にとれば，譚都督期の1912年末は1100万元だったものが，湯が湖南財政を握った13年末には4000万元をこえるにいたった。さらに手書きの数字による額面100元から500元までの紙幣を増発して市場に流通させ，兌換を認めなかったために，その紙幣価値は5割を切り，物価の高騰を招来したのである[27]。さらに湯薌銘は，自らの権力を維持するためにあらゆる手段を用いて財源の確保に狂奔した。たとえば省有財産である常寧の鉱山を担保に外債二百余万元を借り受け，さらに五百余万元の外債の追加をもくろんだのである[28]。こうした省権力を私物化した軍閥湯の暴政は，税収奪の強化とともに，湖南民衆に過重な負担を強いたのである。

一方，湯薌銘は袁世凱による帝制復活運動の尖兵として大きな役割を演じた。1915年8月23日北京に籌安会（理事長楊度）が成立し，袁世凱の帝制を推進するキャンペインが開始されると，湖南にも籌安会湖南分会（会長葉徳輝）が成立した。湖南将軍湯はこれを積極的に支援し，各省将軍の先陣をきって国体変更の運動を促進したのである。10月20日，まず湖南の「国民代表」の選挙を行い，75名の国民代表（功労者・官僚・碩学通儒・卒業資格者・卒業資格相当者・財産家・資本家の7分野からなる）を選出した[29]。10月26日，湖南「国民代表」大会が開かれ，国体決定の投票が行われた。投票は記名投票で，投票用紙にはあらかじめ「君主立憲」の文字が縦書きで印刷されていて，賛成ならば，その下に「賛成」と記すものであった。また投票会場には将軍湯薌銘と巡按使沈金鑒が監察官として臨席し，投票に先立つ挨拶のなかで君主立憲の重要性を力説して各代表を督励した。当然のことながら投票の結果は75票総てが君主立憲に賛成であった。湯はただちに湖南省全体が君主立憲に賛成し，民意の帰するところを十分証明したものである旨を宣布し，各代表とともに「中華帝国万歳」を三唱した。ついで推戴大会を挙行し，中華民国大総統袁公を中華帝国大皇帝として推戴する決議

26） 拙稿「五四運動の諸前提—とくに湖南を中心として」（『鷹陵史学』第19号，1994年）99頁-100頁。
27） 程潜「護国之役前後回憶　付録〈護国軍湖南総司令程潜布告湯薌銘罪状〉」（前掲『文史資料選輯』第48輯）49頁。
28） 同前，52頁。
29） 『長沙大公報』1915年10月27日「国民代表選挙紀聞」（湖南歴史考古研究所近代史組輯「護国運動期間湖南反袁闘争」〈湖南歴史考古研究所『湖南歴史資料』1960年第1期，湖南人民出版社〉）121頁-122頁。

文を採択し，その「民意」をただちに袁世凱に通電，一日もはやく皇帝に即位するよう促したのである[30]。湯は各省将軍のなかでもっとも熱心に袁世凱の皇帝推戴の世論づくりにつとめた一人であった。自ら記した推戴文は80通をこえたし，また湖南の官僚や各法団の代表を積極的に北京に送り込んで推戴を進言させた。その数は109件におよんだという[31]。その功績によってかれは袁世凱から一等侯に封ぜられたのである。当時湖南政府参謀処の書記涂竹居は湯がおかれていた状況について次のように回想している。

> 私は，湯薌銘が最高の栄誉に輝いた伯爵さまだったと，今でもはっきり覚えている。当時長江の上流に陣していた曹錕（中央陸軍第3師長兼長江上遊警備司令）が長沙の湯伯爵に贈った祝電に記された「威信は三湘におよび，名は八侯に冠たり」という文章から，湯薌銘の栄誉と得意の絶頂期であったことがうかがえる[32]。

このように湯の湖南統治は袁世凱北洋軍閥政府の意思にそったものであり，共和を希求し圧政からの解放をもとめる湖南民衆の願望をふみにじるものであった。ふたたび湖南の民衆による闘い――反袁駆湯の闘いが準備されたのである。

3．湖南における反袁駆湯の闘い

辛亥革命によって中華民国が誕生したが，一方では大総統袁世凱ら保守勢力が歴史の流れに逆らって帝制の復活を目指し，一方では孫文ら進歩勢力が広範な民衆との連合を模索し共和の擁護を目指して不断の闘いをつづけていた。この新旧両勢力による尖鋭的な闘いが突出して展開されたのは湖南省であった。ここでは湖南の民衆が第3革命をはさんで前後数年間に展開した，反袁駆湯の闘いのあとを検証する。

はじめに民義社の闘い[33]からみておこう。民義社は，第2革命に敗れて日本に亡命していた湖南出身の旧同盟会員・国民党員らが組織したもので，1913年12月に東京青山南町（鄒永成の寓居）に本部を置き，党内には総理をおかず合議制をとった。政治綱領として「真の共和を回復し，国賊を除き，よい憲法を作り，領土の主権を守る」

30） 『長沙大公報』1915年10月29日「国民代表選挙紀聞」等（同前）122頁124頁。
31） 「関于湯薌銘在湘暴行的回憶（座談訪問記録）」（前掲『湖南文史資料選輯』第4集修訂合編本）73頁等。
32） 涂竹居「湯薌銘在湘暴行及籌備帝制紀実」（前掲『文史資料選輯』第48輯）150頁。
33） 「癸丑失敗後湘中革命党史概略」（前掲『革命文献』第47輯，前掲『護国文献』下，837頁-842頁にも収録されている）による。なお楊世驥『辛亥革命前後湖南史事』（前掲）267頁-273頁，『湖南省志』第1巻（前掲）374頁376頁，楊思義「二次革命失敗後国民党人的形形色色」（前掲『文史資料選輯』第48輯）127頁-131頁参照。

ことを掲げた。あきらかに反袁を標榜したものである。数百名の党員を擁し，その中心となったのは，王道（邵陽出身）・楊王鵬（湘郷）・鄒永成（新化）・劉承烈（益陽）・李国柱（嘉禾）・劉国春（邵陽）・龔鉄錚（湘郷）・楊玉橋（同前）・李錫疇（新化）らであった。

一方1914年7月には，孫文によって中華革命党が東京で結成された。この新党は総理の命令に服従し，厳しい規律のもとに秘密を厳守する秘密結社的集団である。その結成にあたり民義社は全員加入をもとめられたが，それを拒否した。これにたいし孫文らは，民義社党員が自由に中華革命党に参加し，活動のなかで民義社の名を使うことを認めた。こうして両政党は反袁を共通の目的として相互に密接な関係をもったが，実際の闘いのなかでは十分な連携を保つことはできなかった。とはいえ民義社は湖南における反袁闘争の主力部隊として，中華革命党の湖南における別動隊的役割を担っていたといえる[34]。

1914年夏，民義社党員李国柱は，東京で孫文ら中華革命党員李貞伯・杜寒甫・劉鉄らと協議し，7月を目処に雲南・広東・湖北・湖南・四川で武装蜂起することを決めた。李国柱は湖南の責任者としてただちに帰国，乞食に化けて密かに郴県に潜入，軍隊への働きかけと洪江会への呼びかけを行った。ついに6月14日郴県で反袁の蜂起を宣言した。蜂起軍は広範な民衆の支持をうけて，10日足らずで湘南の桂陽・臨武・耒陽・嘉禾・永興等の県城を占領し，蜂起の矛先は湯薌銘に向けられた。このニュースはたちまち北京にも伝わり，袁世凱をおおいに慌てさせた。しかし広東・広西・江西・湖南4省の軍隊が郴県を包囲し，湯薌銘の全兵力が衡陽に集中攻撃を加えたために，李国柱らは支えきれずついに敗北，1か月余りの抗戦で三十余名が陣中に倒れた。李国柱はかろうじて脱出できたが，かれの親族三十余人が連座して殺害された[35]。

1914年6月の郴県蜂起と時を同じくして，民義社のメンバーが相次いで湖南にはいり反袁駆湯の闘いの準備を開始した。王道は長沙・岳州一帯で民義軍創設の準備のために軍隊工作に従事，劉国春は邵陽・衡陽一帯で工作活動を展開，またかれらは民義社湖南支部を湘潭に設け，爆弾の製造を開始した。しかしそれらの活動はことごとく湯薌銘側に露顕し，8月12日の取り締まりでは二百余名の犠牲者をうんだ。劉国春もその一人であった[36]。湯将軍の厳しい弾圧によって湖南での活動を封じられた民義社

34） たとえば民義社は党員鄒永成を中華革命党湖南支部長に推挙した。
35） 「癸丑失敗後湘中革命党史概略」（前掲『革命文献』第47輯）477頁。
36） 同前，478頁。

のメンバーは，湖南を脱出して上海のイギリス・フランス租界へ逃げ込んだ。8月中旬，かれらは会合を開き，湖南での蜂起は今や困難であり，将来の大蜂起に備えて暗殺手段による反袁駆湯の闘いを進めることを決議した。王道・葛龐・劉鉄らはフランス租界内のアジトで爆弾の製造を密かに進める一方，袁世凱ら政府要人の暗殺計画を遂行した。しかし揚州・夏口・潯陽・武昌での暗殺計画は事前に洩れて失敗，またアジトで爆弾が暴発したため租界警察の急襲をうけて劉鉄・葛龐らが拘禁されるにいたった[37]。上海における民義社の活動も租界警察の厳しい監視下にあって行き詰まっていた。時あたかも21か条要求をめぐって世論が沸騰している1915年春，民義社の王道らは，少年再造党の盧佛眼らとはかって上海に救亡会を組織し，祖国滅亡につながる日本の要求を断固拒否することを訴えた。5月9日袁世凱が日本の要求を受け入れるや，かれらは『救亡報』を創刊し，袁打倒の論陣をはったが，過激な言論の故に，3か月足らずして租界当局の発禁処分をうけ，かわって籌安会が上海に機関紙『亜細亜報』を創刊し君主立憲を宣伝したのである。それは上海民義社党員の激しい怒りをかった。9月中旬，民義社党員楊玉橋は『亜細亜報』の社屋に爆弾を投げ込み，自らも負傷して逮捕された。また同党の蕭美成（湘潭出身）らは仲間を率いて，上海閘北警察署を襲撃し，武器等を奪おうとして失敗，フランス租界に逃げ込んだ。うちつづく民義党のテロ行為にたいしフランス租界当局は，かれらを賞金付で指名手配し厳しい探索を行ったため，王道・龔鉄錚ら民義社の中枢部は香港へ逃れざるをえなくなった[38]。

民義社による初期の反袁駆湯の闘いは，その大部分は作戦全体を見通す統一的な指導にかけていたこと，軍隊や会党を安直に利用しようとしたこと，しかも暗殺や一揆等の軍事冒険主義に偏重していたことから，圧倒的優位をほこる軍閥や帝国主義の軍事・警察力のまえに大敗北を喫したのである。このことはすでに同盟会時代の闘いで証明されていたことであった。広範な民衆に働きかけて，組織し，決起させなければ革命の勝利はありえないことをあらためて示したものである。しかし民義社が第3革命以前に展開したこうした果敢な闘いは，湖南各地の青年・知識人や民衆を刺激し，軍閥の圧制にたいする矛盾に目を向けさせないではおかなかった。それは第3革命期の反袁駆湯の闘いに広がりを与える契機となった。

1915年末から16年初めにかけて，第3革命が雲南を席巻している頃，民義社のメン

37） 同前，479頁。
38） 同前，479頁-480頁。

バーは相次いで省城長沙に集結し，反袁駆湯の闘いを開始した。民義社党員楊王鵬は上海で程潜らから千数百元を，同じく王道は劉公（湖北襄陽出身）から5000元をそれぞれ活動費として調達して長沙に潜入，民義社の組織を整えて党勢の拡大をはかった。さらに16年1月10日，民義社は湖南混成旅団の兵士たちとの提携に成功し，2月28日に共同で湯薌銘将軍府を急襲することを決定した。ところが2月20日党員李唐（安化）ら数人が湯薌銘邸宅周辺を監察中，偵察部隊に見つかり，あわてて爆弾を投げつけ自らも傷を負って捕えられた。事すでに露顕したと判断した楊王鵬・龔鉄錚らは，急遽21日午後4時，党員百余名を率いて将軍府と西長街警察署をそれぞれ攻撃したが，頼みとしていた旅団ら兵士の助力もなく敗北した。楊・龔・唐ら四十余名が壮烈な死を遂げ，逮捕された党員は百余名を数えた。再建された民義社の組織に与えた打撃をきわめて大きかった[39]。しかし湯薌銘がかれらを徹底的に追跡しても，また密告通報者に500元の報償金を与える告示[40]を出しても，民義社の闘いやそれを支援する民衆の闘いを阻止することはできなかった。民義社の次なる反袁駆湯の闘いは，程潜護国軍との連携のなかで，共同して民衆を組織し，動員して行われたのである。

次に反袁駆湯の闘いを程潜護国軍のなかで見てみよう。護国軍の圧倒的な影響力のなかで，中華帝国皇帝袁世凱は1916年3月22日，やむなく帝制を取り消し，洪憲の年号を廃止し，大総統への復帰を宣言した。袁世凱股肱の臣湯薌銘もまた帝制への恭順を放棄しなければならなかった。これによって湖南における反袁駆湯の闘いが収束するわけではなかった。むしろ程潜護国軍の呼びかけと影響のもとで，その闘いはさらなる高まりを見せることになった。

湖南は南北要衝の地にあり，広東・広西・貴州・雲南の護国軍側からいえば，湖南のもつ軍事戦略上の意味はきわめて重要であった。護国軍総司令部（雲南昆明）は，1916年1月末程潜を護国軍湖南招撫使に任じ，兵力1営，軍費5000元を支給した。程潜の部隊は，2月3日昆明を出発し，23日に貴陽に到着した。貴陽では貴州都督劉顕世から武器・食糧の全面的な援助と兵力の補給をうけ，27日貴陽を離れ，3月25日に湘西の拠点靖県にはいった。靖県は，西は貴州の鎮遠，南は広西の柳州，東辺は邵陽，北辺は辰・沅に連なる地理的に重要な位置にあった。程潜はこの地の利を利用して湘西各地を平定し，反袁駆湯の勢力を拡大していった。4月10日までに，湘西のうち，常徳・桃源・沅陵・辰谿・古丈・麻陽の6県（北軍の支配地域）を除く21県が相次

39） 同前，480頁-481頁。
40） 「湖南討袁史事〈長沙革命紀事〉」（前掲『革命文献』第四十七輯）485頁。

いで独立を宣言したのである[41]。4月26日，湖南省（75県）のうち48県の代表が靖県公署に集まり，護国軍湖南人民討袁大会が開かれた。大会はまず各県の代表による袁世凱・湯薌銘ら軍閥の圧制の糾弾からはじまり，大会決議――袁世凱の独裁に反対し共和を守るために，雲南の討袁蜂起に呼応し独立を宣言すること，程潜を護国軍湖南総司令とし，討袁軍の全権を委任すること等――を採択した。4月28日，程潜は靖県で正式に護国軍湖南総司令の職に就き，湖南の独立，袁世凱の討伐，袁の任命した官僚の罷免を宣言した[42]。

程潜が湖南総司令に就任する前後から，湖南各地で反袁独立に呼応する動きが相次いで起こっていた[43]。3月19日，永順県で民義社党員羅剣仇（大庸出身）が湘西独立軍の旗を掲げ，三百余の民衆を率いて県城を占拠した[44]。4月15日，平江の民義社党員らは県署を占拠，彭澤鴻を民義軍司令長として岳州・湖北通邑へ進攻した。時を同じくして湘西でも貴州護国軍の進攻にあわせて，民義社党員羅賛侯らが大庸・澧等の県で独立を宣布した[45]。22日から24日にかけて，永興県では知県の留守に乗じて退役軍人らが県公署を占拠した。24日，臨湘県では農民四，五十名が自ら湖南護国軍第1支隊と称して県署を攻撃した。25日，竜山県で民義社党員張玉堂（永順の会党首領）らが会党千余名を糾合して県城を占拠，湘西護国軍と称して貴州の討袁軍との連携をはかった。5月1日夜，武崗の農民八，九十名が県城西北の城壁から潜入して県公署や監獄を襲撃，城民の歓迎をうけ，護国軍と称した。湘郷では民義社党員劉重（永興）・李鉄僧らが，護国軍の名で召募した兵を率いて県署を占拠，3日独立を宣布した。さらに配下の孫興らを邵陽に派遣し，5日邵陽県署に護国軍司令部が誕生した。5日保靖県で農民百余名が隆頭市警察署を襲い，警佐を脅して独立を宣言させ，さらに護国軍独立団を組織させて県城を攻撃した。湘郷から新化へ転進した劉重率いる護国軍の部隊四，五百名は7日，錫鉱山の労働者ら千余名と合流し新化県城を占拠，護国軍総司令劉の名で安民を告示，反袁駆湯の声勢は高まった。それにたいし湯薌銘は9日，北軍倪嗣沖・唐天喜らの部隊を湘郷・新化に急行させて包囲，猛攻を加えた。そのため劉重らは衡山へ撤退したが，衡山の知県に迫って独立を宣布させた。10日に乾城，17日に郴県，18日に耒陽，19日に衡州，24日に瀏陽が相次いで反袁独立を宣言し

41） 程潜「護国之役前後回憶」（前掲『文史資料選輯』第48輯）23頁-30頁。
42） 同前，37頁-38頁。
43） 以下の記述は注記のないかぎり「護国運動期間湖南的反袁闘争」（前掲『湖南歴史資料』960年第1期）所収の「二.湖南各県反袁独立」の史料集による。その史料の多くは1916年5月の『長沙大公報』（未公開）の記事によっている。
44） 同前内の別史料では，3月16日に県城占拠，その数千五六百という。
45） 「癸丑失敗後湘中革命党史概略」（前掲『革命文献』第47輯）481頁。

たのである。

このような湘中・湘南における反袁の拡大を前にして，湯薌銘は最後の防衛線長沙を死守するために大量の銃器と弾薬と兵員の確保に奔走し，程潜護国軍との決戦に備えたのである。

4．むすびにかえて ― 駆湯の勝利にむけて

程潜の護国軍は，1916年5月3日靖県を出発，綏安・城歩をへて，22日に湘西南の重要拠点邵陽にはいり，その矛先を明確に長沙の湯薌銘に向けていた。この事態にたいし，湯は自らの政権の延命をはかるために，5月29日湖南の反袁独立を宣言したのである。今まで忠誠を誓ってきた袁世凱にたいして，「湖南の軍心・民気が激昂してすでに長く」「その憤激を抑えられない」ので，湖南の各界の要請を受け入れて独立を宣布し，雲南・貴州・広西・広東・四川・陝西等と共同の行動をとるとともに，「閣下が一日にもはやく退かなければ，大局は一日として安らかにはならない」，「引退の決心をされる」ようもとめたのである[46]。また今まで人権を無視し残虐な行為を重ねてきた湯薌銘が省民の前で「約法の精神を保障し，真の民意を発揚し，省内の秩序の安寧保全を基本とし，大局を速やかに解決させることを己の職務とし，省民と力を合わせて，この目的を達成する」と誓った[47]。袁世凱を，約法を無視し民意を捏造して帝制を施行したと批判し，それを擁護しつづけてきた自らを，法の平等の原則，共和政治の精神を守る護国の英雄と評したのである[48]。かれがいかなる言辞を弄しようとも，湯の本質はすでに今までの湖南統治のなかで証明済みであった。

さらに湯薌銘は保身のために兄湯化竜を通じて前湖南都督譚延闓に働きかけ，護国軍側と意思の疎通と調停をはかろうとした。6月初め，譚の意を受けた湖南旧軍の曽継梧（新化出身）・趙恒惕（衡山）・陳嘉佑（湘陰）らが長沙にはいった。湯は，自らの湖南の独立宣言に対応する護国軍の編成をかれらに委ねて，護国軍内における発言権の確保をねらった。湖南旧軍と巡防営を合併し，曽継梧を総司令とする湖南護国軍が編成され，また湯自身の直轄する北軍もそれにあわせて改編することとなった[49]。

46） 「湯薌銘宣布“独立”各電―（1）袁世凱電（1916年5月29日）」（『護国文献』下）864頁。なお5月25日の袁世凱宛の退位をせまる電文が「討袁史料（2）湖南独立記」（前掲『革命文献』第48輯）492頁に掲載されている。

47） 「討袁史料（2）―湖南独立記」（前掲『革命文献』第48輯）493頁。

48） 「湯薌銘宣布“独立”各電―（2）致独立各省電（1916年5月29日）・（3）致未独立各省電（1916年5月28日）」（前掲『護国文献』下）864-865頁。

49） 「討袁史料（2）―湖南独立記」（前掲『革命文献』第48輯）496頁。

湯薌銘にあっては独立＝反袁はあくまでも形式であって，その実質は独立を通して湖南における自らの権力を再構築することにあった。裏では腹心江陪庚・華世義・張樹勲・李少青・湯蔭棠らによる北軍の温存と護国軍編成への干渉が繰り返されていた[50]。

程潜の護国軍は6月3日，邵陽を出発，5日湘郷に到着した。6日，袁世凱は反袁の嵐が吹きすさぶなか亡くなると，湖南の形勢は急転回した。10日，程潜の部隊は寧郷に向かい，15日には湘潭に移駐して，湯らの北軍を長沙・湘潭の間に封じ込めたのである。程潜は湘潭で参謀長林修梅・総務処長李仲麟らと，湯を湖南から追放する方策を協議した。そこで湖南のジャーナズム・教育界の名士傅熊湘（醴陵出身）・鄒代藩（新化）・李隆建（醴陵）・劉澤湘（同前）らに「護国軍湖南総司令程潜布告湯薌銘罪状」[51]の一文を起草させ，駆湯のための政治的キャンペインを展開した。

7月1日，程潜の率いる第2旅団全軍が寧郷から長沙郊外に到着，湯薌銘の部隊を撃滅し，さらに各路から長沙が包囲された。驚いた湯は4日夜半，長沙から船で逃亡し，かわって翌5日早朝，先の曽継梧率いる部隊が将軍公署に入り，駆湯の勝利が宣言された。省議会が再開され，曽継梧が臨時代理都督となり，さらに湖南旧軍を2個師団に改編，陳復初・趙恒惕を師団長，劉建藩・卿衡・李佑文・陳嘉佑を旅団長に任じ，ここに旧譚延闓系の湖南軍の指導者が相次いで復活することになった。それはやがて譚延闓による第2期の湖南統治（8月3日湖南省長兼督軍となる）を招来することになった。

第3革命前後に闘われた湖南の反袁駆湯は，民義社の党員，いわゆる国民党あるいは旧同盟会の下部組織のメンバーに支えられて全省的な展開を可能にしてきたにもかかわらず，その果実は，護国軍の指導層や譚延闓の旧湖南軍の指導層の掌中に握られてしまった。このことは，その後もまた湖南を南北軍閥の争奪の場とする素地をつくったともいえる。

50） 同前，497頁。

51） 程潜「護国之役前後回憶　付録〈護国軍湖南総司令程潜布告湯薌銘罪状〉」（前掲『文史資料選輯』第48輯）49頁-51頁。